

本日の学び：「イエスさまのもとでの『一致』」 テキスト：第一コリント1章10-18節

【理解の手がかりとして】

■ コリント書概論

4月～6月にかけて、I・IIコリント書を学んでいく。これらの手紙は、最も確実なパウロの著書の一つである。Iコリントの手紙は、パウロの第三伝道旅行の際のエフェソ滞在中（紀元53～56年）におそらく55年にエフェソから書き送ったものであり、第二の手紙は56年にマケドニアから書き送ったものである。コリントという町は東西貿易の中継地として重要な位置を占め、古代世界にあって商業、文学、美術の中心として、ギリシャ諸都市のうち最も繁栄した有力都市の一つ。パウロは第二回伝道旅行（49～50年にかけて）の際、伝道地として有望であったコリントに1年6ヶ月滞在して伝道し、有力な教会の基礎を築いた。コリントは風紀の悪いことで知られていたが、パウロの伝道には大きな反応を示した。

Iコリントの信徒への手紙 コリント教会における種々の困難を指導、処理するために書き送ったもの。「牧会的な手紙」と言われるように、パウロの牧者としての面目をよく表しており、異教的文化の中に置かれた若き教会の、成長過程に含まれる山積みされた問題と精力的に取り組んだパウロの人格と精神をよく反映している。これは第一世紀半ばにおける一地方教会の実際生活の姿を示すものであるが、パウロの指導と処理の英知は各時代の教会に妥当する。

■ Iコリント 1:10-18 (1:1-17 についても部分解説)

パウロは1節で「召されて」という言葉を用いている。自分は召された者である、これがパウロの自己理解の中心である。その使命は「キリスト・イエスの使徒」となるということ、すなわちキリスト・イエスの福音を宣べ伝え、教会の信仰の指導者となることである。「召し」とは、人の思いを超えた「神の御心」（1:1）によってなされる。パウロはそのことを確信し、したがって揺らぎなくその生涯を神にささげたのである。

そして教会とは「エクレシア（呼び集められた者たち）」である。パウロだけが「召し」を受けた特別でなく、教会の一人一人が皆、「聖なる者（神のものと取り分けられた者）」である。そしてそこには使命がある。それは「主イエス・キリストの名を呼び求める」ことである。

前述のごとく、コリント教会には様々な問題があった。人間の罪が露になっている現実があった。パウロはその問題解決のためにこの手紙を書き、教会の人々を、ある点では叱り、悔い改めを求めようとしている。そのような手紙が本当に意味を持ち、目的を達成するためには、コリント教会の人々が、自分たちは神によって召し集められた神の教会であり、それゆえに聖なる者とされているのだ、という自覚を再生する必要がある。そしてそこから様々なトラブルの解決への道が開けていくのだ、ということをパウロは思っているのである。

教会は、肉の人間の集まりであるがゆえに問題やトラブルに苦しみ平和を失ってしまうようなことがある。しかしその時に思い起こすべきは、自分たちのアイデンティティ、「聖なる者」として与えられた使命である。その使命に立ち返らせるべく、パウロは願いを込めて神の祝福を祈る。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（1:3）と。

人間の組織は、色々なものが満たされ豊かになると守りに入る。しかし実はその時点から後退が始まる。常に新しくあろうとする姿勢がなくなる時、組織は古くなっていく。信仰者一人一人も、教会も、同様である。「わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいる」（1:7）という現在完了形はとても大切。ギリシャ語の現在完了は、「これまでも、そして今も、そしてこれから」という意味である。いわば未完了なのである。「賜物」に充足しているコリント教会、しかしその「豊かさ」を分かち合わない教会であってはならない、とパウロはゲキを飛ばす。そして「わたしたちはまだまだ途上。再臨のキリストが

おいでになるその時まで証しし続けるのだ！」と奨める、それが8節である。

10節でパウロは「勧告」(1:10)という言葉を用いて語りかける。その勧告はこうである。「皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一にし思いを一にして、固く結び合いなさい」(同)。パウロがこのように言うのは、コリント教会に11節にあるような事態が起っていたからである。その現状とは、教会の中にグループ、党派ができ、お互いが、「我々の方が正しい」と言い争っていた、ということである。

「パウロ党」——パウロを慕い、その教えを大切に歩もうとする人々。コリント教会はパウロの伝道によって基礎を据えられたのだから、パウロを慕い、信仰の師と仰ぐ人々がいたことは想像に難くない。ちなみにパウロ自身がそのような党派を作ったのではない。

「アポロ党」——パウロが去った後コリントにやって来た伝道者の代表がアポロ(使徒言行録18:24以下に記載)。彼はユダヤ人で、聖書に詳しい「雄弁家」(使徒18:24)であった。彼は、信仰を論理立てて説明し、人々を導くことに優れた力を発揮した。このアポロのもとに「アポロ党」が生まれた。

「ケファ党」——ケファとは、主イエスの弟子の筆頭であったペトロのこと(ヨハネ1:42)。イエスの直弟子であり初代教会の柱であったペトロの影響がコリント教会にも及んでいたことはあり得ること。「ケファ党」がどのような主張をしていたのかは定かではないが、おそらくパウロの教えよりもよりユダヤ的伝統を尊重するグループではなかったか、と想像する。

「キリスト党」——これは一見、他の分派と違って良いものにも思える。「パウロ党」「アポロ党」「ケファ党」という特定の人物に偏るのは問題だが、「キリスト党」ならよいのではないか、むしろみんなが「キリスト党」になることが大事なのではないか、と。しかし彼らは「自分たちだけがコリントにおける真のクリスチャンである」と主張する頑固な、己のみを正しいとする少数グループであったにちがいない。

このような分派争いにあるコリント教会に対してパウロは言う。「皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一にし思いを一にして、固く結び合いなさい」と。「仲たがい」とは原語では「破れ」という意味の言葉。コリント教会は、まさに引き裂かれた布のような状態、幾つもの断片に裂かれていた教会であったのである。「あなたがたはキリストの体」(1コリント12:27)と後にパウロは記すが、手も足も目も鼻も、それぞれの部分が文字通り「一体」ではなかったのである。

13節の「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」との言葉も、のちの「キリストの体」の教えとつながる。14節以降でパウロが、バプテスマを授けたことの限定(少なさ)について肯定表現していることはどういう意味か。結論からいえば、パウロが重んじるのは「主イエスの名によるバプテスマ」である。肝心なのはただただそのこと。そして彼の使命は、ただ「福音を告げ知らせる」(1:17)ことにあり、自分の指導力、その影響「わたしはあのパウロからバプテスマを受けた」などの栄光をうけることではなかった。

パウロは言う。「キリストの十字架がむなしなものになってしまわないように」(1:17)と。十字架を前に、私達の誰も、誰彼の前に誇れるものはいない。パウロにとって、コリント教会の姿は、まさに「十字架なき」教会に映ったに違いない。「あらゆる言葉、あらゆる知識」(1:5)は確かに「豊か」(同)であったに違いない。しかしパウロは「言葉の知恵によらないで告げ知らせる」(1:17)、すなわち砕かれた魂でひたすらに「キリストの十字架の福音」を告げ知らせること、これを本意としたのである。——ある人は言う。「私達は日々、キリストの十字架という鍬を心の畑に入れられて生きねばならぬ」と。私達の「おごり・傲慢」という罪が日々くだかれていないと、簡単に「自己栄光化」(権力争い)が起こるものである。

私たちは、他者の影響を受けずにはいられない。師と仰ぐ指導者(牧師・宣教師・教師・先輩キリスト者)は誰にでもある。この箇所は、それ自体を否定はしない。しかし、「あなたは何によって信仰(教会)につながっているのか」という根本的な問いを私達に投げかけている。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(ヨハネ15:5)——「わたし(キリスト)」につながりなさい。

『聖書教育』より

「イエスさまの名を共に呼び、イエスさまから愛と配慮の思いを共に与えていただくことで成し遂げられる不思議な『一致』へのヒントを豊かにいただいてまいりましょう。」（聖書の学び～共同体が「一致する」とは）